

立正大学博物館 館報

万吉だより

MA GECHI NEWS

第 25 号 平成 29(2017) 年 9 月

熊谷キャンパス開設 50 周年に思う

館長 時枝 務

熊谷キャンパスが開設された昭和 42 年（1967）は、今から振り返ると、大きな時代の転機であった。戦後政治をリードした吉田茂（1878-1967）が、10 月 20 日に大磯の自宅で亡くなり、戦後初めての国葬が執り行われた。吉田の死は、戦後というひとつの時代が終わりを告げたことを象徴する出来事のように受け止められ、「もはや戦後は終わった」という実感が多くの国民の共有するところになった。しかし、実際には、若者が 60 年安保闘争を戦った「政治の季節」が終わり、自由民主党による保守安定政権が定着し、政治に関心を持たない国民が増えていた。

多くの若者は、グループサウンズの奏でるどこかやるせない音楽に惹かれ、のんびりとした青春を謳歌していた。ちなみに、この年のレコード大賞は、ジャッキー吉川とブルー・コメッツのブルー・シャトーである。森と泉に囲まれた城で、赤い薔薇の花の香りに酔いしれるという幻想的な歌詞は、現実から逃避したい若者の心の投影にほかなるまい。ツイッギーが来日し、彼女の着ていたミニスカートが若い女性のこころを捉えて大流行し、女性のファッションが大きく変わった。この年、発売されたばかりのリカちゃん人形も、かわいいミニスカートをはいていた。

ミニスカートが流行した背景には、ファッション感覚の変化だけでなく、消費文化が爛熟するための条件が整ったことがある。たとえば、この年に渋谷の東急百貨店本店や新宿の小田急百貨店が開店し、デパートが消費者の購買欲を掻き立てたように、戦後の経済成長が消費者に実感をもって受け止められ、具体的な消費活動として結実したのである。山本直純が、森永エールチョコレートのテレビコマーシャルで、「大きいことはいいことだ」と叫んだことばも、消費者の購買力の増強に裏付けられていた。

しかし、その反面、水俣病やイタイイタイ病の病因が判明し、四日市ぜんそく訴訟に始まり、それらに対応すべく公害対策基本法が制定された年でもある。経済的な発展の影で、企業による自然破壊が進み、公害が問題になった時代でもあった。

では、そんな時代の転換期の熊谷キャンパスは、どうだったのか。その答えは、秋に開催予定の特別展、熊谷キャンパス開設 50 周年記念「立正生の学び舎 - 熊谷キャンパスの半世紀 -」展で示すので、ぜひご覧いただきたい。

第 12 回企画展

「板碑」展開催にあたって

立正大学博物館には数多くの収蔵品があります。その多くは眞鍋孝志氏をはじめ研究者の方々が蒐集された貴重な資料です。

第 12 回企画展では本学文学部史学科教授、久保常晴博士蒐集の板碑について取り上げます。

板碑（板石塔婆）とは、中世に供養塔として造立された石塔婆の 1 つです。来館者の皆様から「お墓とは違うのでしょうか」という質問をよく受けますが、お墓との違いは、板碑は仏や菩薩を配し供養を行なうことによって得られる功德をもって故人の菩提を弔うことを目的としています。そのためお墓とは異なり主要な位置に故人の戒名を刻むことはありません。

板碑の形状は、板状に加工した石材の頭部を三角形にし、頭部と反対側の先は基礎といって地面に建てやすいように尖らせています。頭部の下には二条線とよばれる 2 本の線刻で区画し、その下に種子や供養年月日などが刻まれている形が一般的です。この形態を整えた現在最も古い紀年銘をもつ板碑は、熊谷市須賀広で発見された嘉禄 3（1227）年の板碑です。

現在、立正大学博物館で所蔵している板碑は計 43 基あります。そのほとんどは久保常晴博士により蒐集、寄贈を受けた資料です。板碑の所在地は埼玉県・東京都・千葉県が中心で、題目板碑と



久保常晴 博士

いわれる日蓮宗に特有の題目、「南無妙法蓮華經」を刻んだ板碑を主体としています。

久保博士が蒐集された当時、板碑は文化財としての認識が低く、本来の所在地から離れていたものと考えられています。これらの板碑資料は長年、考古学資料室で展示され、立正大学における考古学教育に活用されてきました。

また平成 21 年には第 6 回特別展として「題目板碑の世界」が開催されました。日蓮宗の信仰と深く関わりながら造立されてきた題目板碑について、立正大学所蔵の題目板碑 11 基とともに紹介しました。



板碑展示の様子（2 階 常設展示）



久保常晴著『仏教考古学研究』

久保常晴博士は明治 40 (1907) 年 3 月、久保常次郎氏の長男として北海道旭川市に生まれました。大正 2 (1913) 年に北海道釧路市第二尋常小学校に入学し、大正 9 年には北海道庁立釧路中学校にて学び、卒業後釧路第四尋常小学校代用教員として勤めました。教員退職後、昭和 3 (1928) 年 4 月、立正大学予科に入学、予科を修了後は文学部史学科に進みました。

その後、長年東京帝室博物館に勤務し、仏教考古学を体系化したことで知られる石田茂作博士 (1894 ~ 1977) の指導の下、卒業論文「題目板碑を通じて見たる関東地方に於ける日蓮宗の状勢に就いて」を執筆され、昭和 9 (1934) 年に文学部史学科を卒業されました。卒業後は史学科研究室の副手・助手を勤められ、一時期大学を離れましたが、昭和 22 (1947) 年より専門部講師、予科講師を経て、昭和 30 (1955) 年に立正大学教授に就任されました。昭和 52 (1977) 年に立正大学を定年退職したのち昭和 53 (1978) 年に亡くなりました。

久保博士の板碑研究の特色は大きく 3 つに分類されます。第 1 に板碑の名称を論じたこと、第 2 に題目板碑を研究したこと、第 3 に北海道と関東の板碑について紹介しています。

今日の板碑研究は仏教考古学と必ずしも同義ではなくなくなっていますが、石田茂作博士や久保常晴博士の時代においては、板碑研究は仏教考古学研究そのものでした。

本展では、80 年を超える歴史を有する立正大学の板碑研究について、その草分け的な存在である石田茂作博士と久保常晴博士の研究について紹介するとともに、当館所蔵の久保常晴博士の板碑コレクションを紹介します。



阿弥陀三尊板碑 (当館所蔵)

お知らせ

立正大学博物館 第 12 回企画展「板 碑」展

開催日：2017 年 10 月 2 日 (月) ~ 10 月 28 日 (土)

場 所：立正大学博物館 第 1 展示室

時 間：10 時 ~ 16 時

休館日：火曜・日曜、大学休業日

入館料：無 料

* 詳細は当館 HP を御覧ください。

第 12 回特別展 熊谷キャンパス開設 50 周年展にあたって

立正大学熊谷キャンパスは、昭和 42（1967）年に開設してから今年で 50 年を迎えました。荒川を望む緑豊かな江南台地を切り開いて建設された熊谷キャンパスは、東京ドーム 8 個分に相当する約 35 万㎡の広大な敷地を有し、各種スポーツ専用グラウンドをはじめ充実した学びの環境を提供しています。

熊谷キャンパス開設のきっかけは昭和 30 年代の終わりごろから、大学入学志願者数が急増したことに起因します。その頃、第 1 次ベビーブームの時代に生まれた世代が大学進学該当年齢（18 歳）に達したことにより、全国的に新キャンパスの開設や大学新設のラッシュがはじまりました。

立正大学においても学生の増員と施設の拡充を目的に第 2 キャンパス開設を求める活動がはじまり、埼玉県大宮市や東京都八王子市など多数の候補地の中から昭和 39（1964）年 2 月 11 日、第 68 回立正大学理事会において埼玉県熊谷市への新キャンパス開設の決議がなされました。

初期の建設計画では、昭和 41 年の開校を目標に熊谷市万吉地内と江南村野原地内（現 熊谷市）の 33 万㎡の敷地に教養課程（大学 1、2 年）の学生 3000 人の収容が可能な施設の建設が計画されました。

当時、熊谷市街から建設予定地までは現在のような直線的で整地された道路環境ではなく、大きく左に迂回した狭い泥道で交通機関もバスが 1 日 3 本ある程度でした。そのような環境の中、野球場や陸上競技場、ラグビー場などのスポーツ施設を中心とした第 1 期工事が行なわれました。このときに完成した各種スポーツ施設は公式競技会場として各大会で使用されるなど

最新の設備を整えていました。

昭和 41 年 6 月からは第 II・III 期工事が進められ、新進気鋭の建築家として著名な槇文彦氏が設計による施設の充実が図られました。

槇文彦氏は昭和 3（1928）年、東京都に生まれました。昭和 16（1941）年に慶應義塾幼稚舎を卒業し、慶應義塾普通部を経て、慶應義塾大学予科を中退し、東京大学工学部建築学科に入学し、昭和 27（1952）年に東京大学工学部建築学科を卒業しました。その後、アメリカのクランブルック美術学院及びハーバード大学大学院の修士課程を修了し、スキッドモア・オーウィングズ・アンド・メリル、セルト・ジャクソン建築設計事務所やワシントン大学のキャンパス・プランニング・オフィスに勤務しました。ワシントン大学とハーバード大学では都市デザインの准教授を務められ、昭和 40（1965）年に帰国されました。帰国後、株式会社槇総合計画事務所を設立し、熊谷キャンパスの設計に携わりました。

槇氏は熊谷キャンパスを建設するにあたり、次の 3 つの考えを基にされました。①熊谷の美しい自然環境を保存し同時に豊かな集合性を建築空間に求める、②キャンパスがつねにまとまった形をもつ③学生・教職員の生活に全体的に対応することができる小都市のようなキャンパスづくり。これらは大学紛争が問題となっていた当時、学生生活に都市性を与えた新しい大学のあり方を建築面から示した画期的な試みでした。

槇氏は熊谷キャンパス設計へのアプローチの中でもとくに、学生たちによる自由な思考や体験の機会を与える不特定の多目空間（広場やコリドール（回廊）、ステーション）の設置に着目していました。それらの不特定の多目空間は交通の接点または通路という特定の機能をもちながら、「憩い・集いの場」または「インフォメーション」の場としての役割をもちます。



熊谷キャンパス建設予定地



槇文彦氏による説明会の様子



槇文彦氏設計の“コリドール”（現 ゲートプラザ1階）

槇氏はこの熊谷キャンパスの設計により、第10回毎日新聞芸術賞・建築賞（昭和43年度毎日新聞社）を受賞されました。

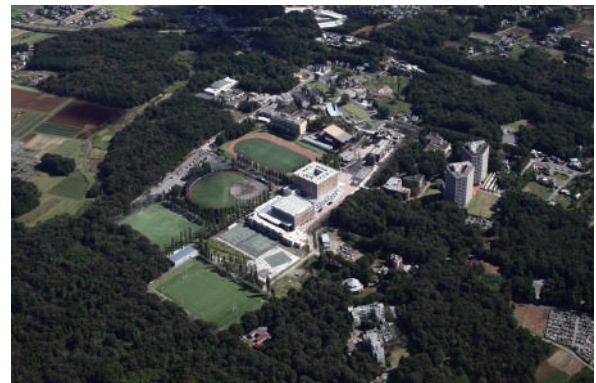
昭和42（1967）年には、熊谷キャンパスに教養部が設置され、入学式（熊谷キャンパス第1回）が執り行われました。その後、昭和49（1974）年の入学定員増の認可に伴い熊谷キャンパスでは新図書館の建設、教養部実験棟（現在の博物館施設）・研究棟、福利厚生棟や学生寮が設置されました。

平成19（2007）年からは再開発工事が行われ、熊谷キャンパスは新たな転換期を迎えました。その後、広大なキャンパスは少しずつ形を変えながら、現在では2学部4学科を有し約2200人の学生が充実した学生生活を送っています。

本展では、立正大学熊谷キャンパスの沿革と拡がり写真資料・図面などをもとに紹介します。また、あわせてキャンパス建設に伴う発掘調査で出土した立正大学熊谷校内遺跡出土資料を展示します。開設から半世紀を経た今、立正大学熊谷キャンパスの原点を知る機会となるのではないのでしょうか。



昭和45（1970）年頃の熊谷キャンパス



現在の熊谷キャンパス

お知らせ

立正大学博物館 第12回特別展
熊谷キャンパス開設50周年記念
「立正生の学び舎 - 熊谷キャンパスの半世紀 -」展

開催日：2017年11月1日（水）～未定
場 所：立正大学博物館 第1展示室
入館料：無 料

* 詳細は当館HPを御覧ください。

NEWS ①

品川キャンパス展示

第 11 回品川キャンパス展示は、博物館収蔵資料紹介として吉田格コレクションを取りあげます。

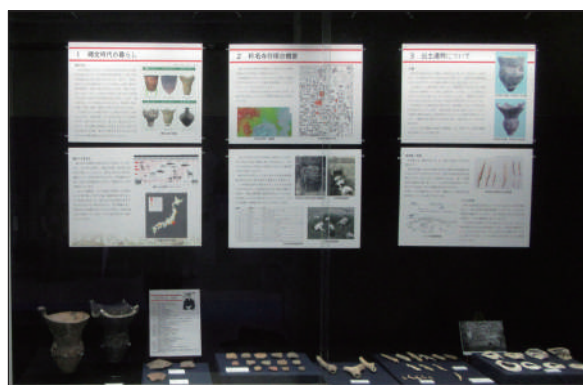
吉田格コレクションは、旧石器時代・縄文時代の研究をされた吉田氏が、直接手掛けた膨大な発掘資料を、ご自身の出身校でもある立正大学に寄贈頂いた貴重な資料です。なかでも、花輪台貝塚・称名寺貝塚の出土資料は、吉田氏によって設定された縄文土器編年における標識土器として知られています。

今回の展示では、縄文時代の貝塚として著名な称名寺貝塚をとりあげ、出土した資料を紹介します。本展示は、平成 29 年 8 月 9 日(水)～11 日(金)に行われた博物館館務実習において、実習生と共に作製しました。

展示期間は平成 29 年 9 月 6 日(水)から 10 月 31 日(火)までを予定しています。



実習の様子



展示の様子

NEWS ②

平成 29 年度の館務実習は、以下の日程で行ないました。実習生は文学部史学科 2 名、文学部哲学科 2 名、文学部文学科 1 名、仏教学部仏教学科 1 名、心理学部対人・社会心理学科 1 名の計 7 名でした。

8 月 5 日(土)

文化史に関する講義と梱包実習

講師：井上 尚明 氏 (立正大学非常勤講師)

8 月 7 日(月)

刀剣の取扱いに関する講義と実習

講師：田嶋 和久 氏 (文学部社会学科准教授)

8 月 8 日(火)

古文書に関する講義と実習

講師：石山 秀和 氏 (文学部史学科准教授)

8 月 9 日(水)～11 日(金)

展示に関する実習

講師：池田奈緒子 氏 (当館非常勤学芸員)

8 月 10 日(木)



平成 29 年度 館務実習生

8 月 12 日(土)

自然誌に関する講義と実習

講師：北沢 俊幸 氏

(地球環境科学部環境システム科 講師)

寄贈資料紹介

熊野家墓所出土 礫石経

立正大学博物館には開館以来、立正大学の卒業生や教員、そのご遺族さらには仏教考古学に興味をもたれる方々から様々な資料が寄贈されています。今回は今年度、山口県在住の熊野譲氏より寄贈いただいた 29 点の礫石経を紹介します。

本資料は平成 28 年 3 月、山口県防府市大崎江良に所在する熊野家墓所にて墓石の整理作業の際に出土しました。熊野家はもと大内氏の家臣でその後、毛利氏に仕えたと伝えられています。近世に入ると萩藩一門家老 2 代目当主の右田毛利元俱の家臣となりました。右田毛利の家老職を務めたほか、明治期には牟礼村外一ヶ村戸長を務めるなどしたのち没落しました。没落以前は墓所のあった防府市大崎江良に居を構えていましたが、その後移転しています。もとの熊野邸は現在、熊野家と同じく右田毛利の家臣であった若月家の所有となっています。また、敷地内にある樹齢 300 年～400 年のゴヨウマツはその様相から「竜が臥しているごとく」として「臥竜松」と命名され、平成 2 年に山口県の天然記念物として指定されています。

礫石経とは、経典を小石に書写したもので、一石に一字ずつ書写したものが多くことから一字一石経とも呼ばれています。石は 2～5cm ほどの扁平な川原石が多く用いられますが、10cm を超える石を用いることもあります。また本資料のように一石に多数の文字が書写されているものもあ



表裏に書写された経典



熊野 譲氏

り、それを多字一石経といいます。礫石経は中世から近世、とくに江戸時代に集中しています。今回寄贈を受けた礫石経に書かれた文字は全て墨書によるもので、朱や金泥、彫字は確認されませんでした。判読可能な文字から経文は浄土三部経の 1 つ、佛説無量壽經と思われる、各面を埋め尽くすように米粒大の文字の大きさと書写されています。石は 10～20cm ほどの扁平な石を用いています。

出土状況は、明治中頃の墓石の 50～60cm ほど下より出土しました。礫石経の下には幅 70cm ほどの板石があり、さらに板石の下には高さ 60～70cm ほどの近世のものと考えられる甕が埋められていました。甕の中には変色した布の切れ端が数点と泥状の物質が確認されています。

今回ご寄贈いただいた資料については今後整理を行い、早期に報告・展示等を行ないたいと思います。末筆ではございますが、このたび貴重な資料を寄贈下さいました熊野譲氏に厚くお礼申し上げます。



熊野氏寄贈 礫石経 (一部)

見学者の声

当館に寄せられたご意見・ご感想をご紹介致します。今後とも、皆様の声を博物館運営や展示に反映できるよう務めてまいります。貴重なご意見・ご感想をありがとうございました。

◆初めての訪問です。とても素晴らしく驚きました。(県外・男性)

◆日本各地の窯跡、遺跡が展示されていてすばらしい館でした。来てよかったです。

(県外・男性)

◆貴重なものを見せていただきありがとうございました。

(県内・女性)

◆地域の出土品に興味がありました。

(県内・男性)

利用案内

所在地：〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

立正大学熊谷キャンパス内

TEL 048 - 536 - 6150

FAX 048 - 536 - 6170

開館日：月・水・木・金・土曜日（大学休業中を除く）

開館時間： 10：00～16：00

※詳細につきましては、博物館ホームページをご覧ください。

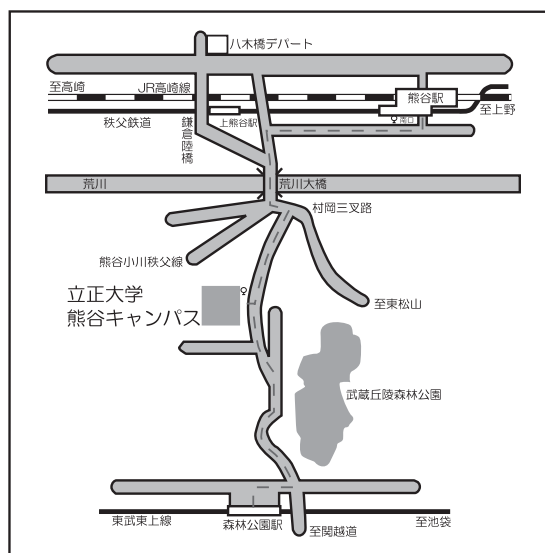
交通機関：

① JR 高崎線、北陸新幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。
南口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 10 分。

② 東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 12 分。

お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課

(048-536-6010) にご連絡下さい。



あ と が き

今年度、立正大学熊谷キャンパスは開設 50 周年を迎えます。緑豊かな 12 万坪に及ぶ広大な建設用地は、半世紀を経た現在では施設も充実し、熊谷市をはじめ地域の皆様に支えられ約 2200 人の学生が学生生活を送っています。

当館ではそれを記念し特別展を開催いたします。熊谷キャンパスの今と昔を知る機会となるのではないのでしょうか。

立正大学博物館館報 万吉だより 第 25 号

平成 29 (2017) 年 9 月 1 日発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

TEL 048 - 536 - 6150

FAX 048 - 536 - 6170

E-mail : museum@ris.ac.jp

URL : <http://www.ris.ac.jp/museum/index>

題字揮毫 田淵 観 斎 (立正大学名誉教授)

(印刷：アサヒコミュニケーションズ)